

## カロリン群島メレヨンの戦い

千葉県 今野 清次郎

—『メレヨンの戦い』副題・敵の上陸なき玉砕戦  
死の島を出版されたそうですが—

私は敗戦後メレヨン島から復員した数少ない兵の一人です。

平成七年、戦後五十年を迎え、戦記、追悼記等で百花繚乱の相を呈しましたが、我々のように一命を国に捧げた者から見ると寂然としません。またメレヨン島のように米国が素通りしたところは、戦力の浪費だ、その戦死者は犬死にだとの声も聞こえてきます。

なるほど、満州事変後の日本軍の行動を見れば、侵略戦争だとか残虐だとも、当てはまるころもありましよう。しかし、戦争は政治の延長です。少なくともこの戦争の実態を正確に把握するには、日本についてはペリーの砲艦外交から、中国については阿片戦争か

ら説かなければなりません。

—莫大な資料と長時間の年数を要したでしょう—  
資料の蒐集だけでも十年近くかかり、八畳の書斎は畳の上まで本で堆く積まれました。復員してから大学に入りましたが畑違いの専門で、その意味でも苦勞しました。多くの先輩、同僚、参考文献のお陰で、昨年七月に刊行できました。

—前段の列強の植民地政策と日本の植民地解放政策が真正面からぶつかったというのですね—

そうです。ロシアの東方政策、イギリス人の東漸政策、アメリカの西漸政策が、朝鮮・中国を中心としてがっぷり衝突したのです。日本の独立と朝鮮を中国から独立させるために日清戦争を戦い、朝鮮の独立と中国の領土保全のために日露戦争が起きたのです。そして最後の総仕上げがアジア解放戦争です。大東亜戦争終了後もイギリス、フランス、オランダは植民地の再構築を計画しましたが、各国の独立運動の前に挫折しました。

日本が日露戦争に敢然と立ち上がらなかつたら、満

州は沿海州や中央アジアのように、ロシアの領土となつていたでしょう。

―出版されてどんな感じでした―

メレヨン島で機銃掃射や空爆や飢餓で亡くなった人に対する何よりの餞ができたと思ひ、またあなた方の死は無駄死にでなかつたと大声で叫びました。

―今次大戦の苦労話を一つお話ください―  
大きく分けると三つになります。

一、輸送中の危機

二、島での飛行機との戦い

三、自活への戦い

に分けられると思ひます。

北海道の増毛町で生まれ、家は広く農園を經營していました。男四人兄弟の末っ子でした。私が徴兵検査を受ける時は、上の兄は三人とも召集され服務中でした。

現役で昭和十八年一月十日入隊、二月二十五日吹雪の日、満州へ渡り、三月六日、東安の野砲兵第四十二

連隊に配属になりました。そこで猛訓練の後、一期の検閲を受け、国境警備に従事しておりました。

検閲のとき、面白いことがありました。指揮小隊長殿が間違ひの号令を掛けましたが、私が正しい号令を復唱し、撃つた弾丸が標的に命中し、講評は良好でした。不幸にして病を得て西東安病院に入院しました。

一等兵になるとき、一選抜でしたが、上等兵になる時は入院が災いして五人中辛くも三番でした。

訓練中に多くの将校・下士官に接しましたが、中学校教育さえ受けていたら少尉になれたのにと切齒扼腕したものでした。大学くらい出ていないと人の上に立てないと思ひが、復員してから私を大学へ進めたのです。

昭和十九年一月十五日、退院の報告を第三大隊の第七中隊の事務室で八木准尉に申告しましたところ、練成隊に配属となり、間もなく動員室勤務となりました。業務は部隊出勤時の編制装備、行動計画書の作成であり、小なりとはいえ、軍の機密の一端に触れることもありました。

緒戦の大勝利は米軍の反撃で逆転、苦戦を強いられ、ジリ貧状態に陥っていき、関東軍の南方戦転出が耳に入ってくるようになりました。

一月末、第三大隊動員計画が作成されました。

—いよいよ南方へ出動ですね—

私も二年兵になり、上等兵に進級しました。関東軍唯一の無線放送が中部トラック諸島の米機動部隊の急襲を連日放送していました。

二月二十四日朝九時ころ、師団司令部の高級将校が来て連隊長に命令書を伝達しました。

「口号演習に一個大隊参加すべし」

指令は第三大隊で「口号作戦」は出動を意味しました。連隊長は第三大隊に出動の命令を下しました。大隊長は一色大尉で、松浦忠平少尉が大隊副官でした。

大隊本部の編制は次のとおりでした。

野砲第三大隊本部 大隊長 一色佐六

第七中隊 中隊長 藤沢勝一

第八中隊 中隊長 高橋久右衛門

第九中隊 中隊長 加藤浅二

歩兵中隊と異なったところは、各中隊に小隊長と同格の中隊段列表が付いていることです。私物の整理と遺書で慌ただしい日が暮れていきました。

二十六日、軍装検査。二十七日出発です。

真珠湾攻撃の勝利も束の間、ミッドウェー沖の海戦で虎の子の航空母艦を失い、以後連合艦隊は再建できなかつた。日本海軍はアメリカ海軍の北上作戦と比島作戦の侵攻に備え、内南洋諸島の島嶼の防備を強化しました。比島侵攻はパラオ島、メレヨンの線で阻止する作戦でした。

陸兵の第一派兵は当初、トラックに一個師団、メレヨンに二個大隊、硫黄島に一個大隊、ポナペ、クチンに各混成旅団、サイパン、グアムに各海上機動兵団一の計画でした。

下命により各地で南洋派遣支隊の編制が急がれました。福山連隊はメレヨン派遣南洋第五支隊の編制をすることとなり、福山連隊は昭和十八年十二月十六日編制完了し、一月八日夜門司を出港し、九日朝佐伯湾に投錨しました。

一月十一日朝、福山連隊の将兵の乗船した「江りえ丸」は他の船舶と船団を組み前線へ向かいました。一瞬の緩みか、魔の瞬間か魚雷が船腹に命中しました。

二月六日、クウェジュリン、ルオットの玉砕で中部太平洋の戦線は緊迫の度を深め、虎の子の関東軍の転用を決意し、それが第三大隊野砲にも波及して来たのです。福山連隊（南洋五支隊）が陸軍のメレヨン守備の予定でしたが、魚雷により沈没し、関東軍七派の歩兵二個大隊と我が第三大隊が派遣となりました。

わが大隊の入った西松二号船団は「松江丸」に乗船、三月三日、釜山を出発しました。船団はマリアナ、トラック島方面行きの東松船団と台湾、パラオ行きの西松船団に分かれ、参加船舶一〇〇隻、輸送物資約五〇万トンが予定されました。アメリカもオレンジ計画により、攻撃目標を艦船から輸送船に切り替え、潜水艦は狼群戦法を採るようになりました。

護衛艦に護られ、馬公、高雄經由パラオに向かいました。雷跡に何回か追跡されましたが、三月二十八日夕方パラオに到着しました。

我々部隊は川原大佐の指揮に入り、カロリン群島メレヨン守備に着くことになりました。

——いよいよメレヨン島の守備ですね——

そうです。メレヨン守備隊はカロリン群島メレヨン島に上陸し、飛行場を確保し、上陸アメリカ軍を撃退するのが任務でした。二十九日の朝八時、第一警備の中、「松江丸」は抜錨し思い出のパラオを後にしました。その時マツカーサーはアドミラルティ諸島に上陸していました。既にトラック島は無力化し、ラバウルの唯一の後方中継地パラオが重要基地となってきました。敵艦隊、飛行機の行動も慌ただしくなったのです。二十九日俄然、トラックとメレヨンに空襲がありました。ペリリュー発進機が米機動部隊の西進を確認し、メレヨン機も別にニューギニア北方に一群を発見しました。「松江丸」船団は全速力で北進し、避難しました。当時パラオに空母はなく、一七〇機の基地航空兵力で邀撃しました。薄暮攻撃で我が軍は戦果を挙げましたが、三十日敵の早朝の先制攻撃で壊滅的損害を受

けました。物量差が歴然と現われ出したのです。

今までの護衛艦「若竹」に感謝しながら、「夕月」「水無月」に伴われ出港しました。三月三十日前後、パラオ、ホーランジヤ、アイタベに大空襲があり、四月一日にはメレヨンに大空襲があり、滑走路、施設に大損害を被りました。

大本営では今後、ヤップ、メレヨン、セントアンデレウ諸島に敵の上陸可能性ありと判断し、ヤップ、メレヨンに現在輸送中の部隊（第七派遣隊、南洋第五支隊）を入れることを急いだのです。

四月五日サイパン港に入港、入港後、本部田辺人事係は川原支隊長に第三十一軍に提示する戦力判断表を提出しました。第七派遣隊は概ね優秀、南洋第五支隊は良の評価でした。四月六日、サイパンに上陸を許されました。波止場にメレヨン行きの木の札を付けた高角砲の砲身や部品が積んでありました。

四月七日、思い出のサイパンを出港、メレヨンに向かいました。船団は陸兵満載の「松江丸」「新玉丸」「木津川丸」の三隻で、もちろん護衛艦付きです。

我々の発った三カ月後にサイパンに米軍が上陸し主戦場となり、その出先のメレヨンも多大の影響を受けることになりました。敵潜水艦に「新玉丸」が襲撃され、引続き「木津川丸」も火の玉となりました。「松江丸」の護衛艦と敵潜水艦の熾烈な死闘が続きました。

護衛艦に護られようやく戦場を離脱しました。怖いというより無我夢中の一瞬でした。「松江丸」は夜明け、グアム島アグラ港に待避・入港しました。九死に一生を得たとはこのことでしょう。

四月九日九時、アブラ港を出港、メレヨンに向かいました。三隻の船団は今や本船だけ、釜山を出港して四十日になります。護衛は三隻、グアムから友軍機も哨戒につきました。心強い限りでした。十日の夜も護衛艦の爆雷が響く、あと一日です。夜半十時、またも敵襲があり、突如船体が揺れ、汽笛が鳴りました。退席準備のブザーがなり船内は動揺し混乱しました。魚雷は本船の右舷機関部に接触しましたが不発で、船底をくぐりそれで行ったと聞きほっとしました。明日はメレヨンというのに夜半またも敵襲を受けましたが、

「松江丸」の幸運を信じ最後の夜を耐えました。護衛艦も良くやったとばかり感謝しました。

全速で進む左舷の水平線が薄明るくなってきました。あと数時間の辛抱です。釜山以来の長旅もようやく終わるか。敵艦に追われながらの吹雪の玄界灘、酷暑のバシー海峡、窮屈に耐え、空襲に怯えた西東安から西カロリンへの命がけの旅も終わるかと思無量でした。メレヨン島へ近付くと日の丸鮮やかな零戦四機のお迎えがあり、思わず一しずくの涙が頬を伝わって流れたものです。

やがて水平線に緑の線が見え、近付くにつれ小島になりました。「松江丸」はメレヨン外海を半周し、内海に投錨しました。釜山出港以来四十二日間、昭和十九年四月十一日、記念すべき日です。

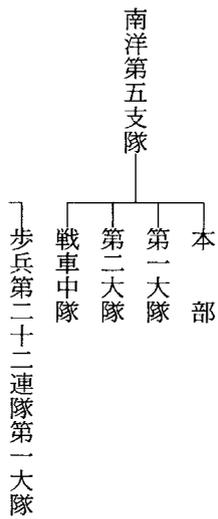
— いよいよ敵上陸なきメレヨンの戦いですね—

南洋群島はサンゴ礁、火山島から成る大小一、六〇〇の中の一つで、トラック島の西四八九カイリ、グアム島の南三二五カイリにあり、日本の委任統治領です。東西約一〇キロ、南北六キロの間に十五のサンゴ礁か

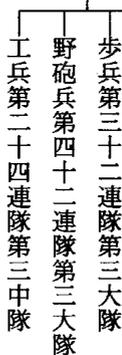
らなり、全島標高二メートル、椰子五五〇〇本、パンの木六五〇、タロイモ若干、温度、湿度ともに高い。フラックツプ島が一番大きく、一五〇〇メートルを底辺とする三角計で飛行場があります。他の七島は長さ八〇〇〜一〇〇〇メートル、幅二〇〇〜四〇〇メートルで細長く、中央に湿地がありました。

湾内は東湖、西湖に別れ、水深は一メートル、五、六千トンの船の泊地になります。蠅、蚊が多く、アメーバや Dengue 熱、赤虫による被害も多い。島民は約四〇〇人くらいで自給自足で純朴でした。昭和十六年から飛行場が建設され、日、米ともハワイ・フィリピンの中継地として重要視していました。

1、メレヨン守備隊当初編成表（昭和十九年六月）



第七派遣隊



高射砲五二大隊三中隊

2、独立混成第五十旅団編成（昭和十九年六月改編）

旅団司令部

参謀部

副官部

經理部

軍医部

歩兵第三三一大隊

歩兵第三三二大隊

歩兵第三三三大隊

歩兵第三三四大隊

砲兵大隊

工兵中隊

戦車中隊

高射砲中隊

通信中隊

船舶工兵小隊

陸軍約三、五〇〇人に海軍も三、五〇〇人です。

メレヨン島には二月二十五日初空襲があったそうです。二月二十八日の夜間の空襲も相当の損害があったとのこと。三月二十日のパラオ空襲の後、敵空母がメレヨン湾内に突入、島内の諸施設に多大の損害を与えた由。

四月八日、零戦十六機がパラオから飛来、我々の上陸を援護してくれました。零戦の滞空中に人員、兵器、資材、食糧を一挙に上陸させ集積地に荷物を積みました。徹夜で作業を完了しました。日本軍のメレヨン上陸を察し、夜半、敵機が偵察にきましたが、十三日に作業を完了しました。

十四日、駆逐艦に護衛された「山陽丸」軍団で第二一六設営隊九八七名が資材と共に上陸しました。

メレヨン上陸の川原健太郎大佐は、第三十一軍隷下トラック地区集団長の指揮下に入り、本土防衛の一拠点として本島飛行場を守り抜くことが任務となったの

です。敵の上陸地点を北方外海と判断して水際撃滅作戦を立て、主力をフララップに配備し、四月末までに野戦陣地を構築、六月末までにはトーチカを根幹として半永久陣地の完成をめざしました。

四月十六日夜、大型機六機の来襲。十八日昼間から数十機の編隊で来襲、悠々と爆撃していききました。我が方も反撃しました。揚陸した器材、資材の大部と集積したままの食糧を焼失し、後に守備隊全員の生死に重大な影響を生じました。

四月十九日、邀撃用の飛行部隊はサイパンに復帰しました。四月十九日正午、哨戒機から敵の機動部隊がメレヨンに上陸の公算あり、との通報が入りました。各島各隊必死の応戦準備に入りました。朝方までに準備を完了し満を持したのですが、夜が白み朝になると敵は上陸せず反転しました。緊張の一夜でした。

その後十時、B 24十数機の空襲がありました。アドミラルティイから毎日定期便のように来ました。アドミラルティイはメレヨンの南東、ビスマルク諸島ニューブリテン島の北六五〇キロにあり、最大の島は淡路島の

三倍くらいあります。日本軍が一時ニューブリテン島を確保しましたが、強大な米軍に押され、マヌス島に撤退しました。

米軍はシーアードに大基地を建設、島嶼の日本軍爆撃の基地としました。もちろん、メレヨン島はその行動範囲内です。二十一日、十数機、二十二日、二十二機と執拗を極めます。射撃部隊も応戦、敵も有効弾を恐れ高所からの爆撃に切り替えました。メレヨンが執拗に爆撃されるので、四月十四日、零戦二十七機がサイパンから飛来し果敢な空戦を展開し、相当の効果を挙げました。我が方はこの時、空中爆雷という新兵器を使いました。これは三番三号（三〇キロ）といい、傘状に飛散する黄燐入発火弾の秘密兵器でした。

B 24邀撃戦で戦果を上げましたが、我が空軍にも損害が多く、メレヨンにおける邀撃戦は断念されました。B 24は連日爆撃を繰り返し、弾薬庫、資材庫、ガソリン缶を焼失していききました。

米軍はついにホーランジアとアイタベに上陸しまし

た。マッカーサーの予定の作戦です。そしてメレオンは敵前にさらされました。

第三十一軍は、メレオンを要点として堅固に防衛するため軍直轄部隊として発令、陣地の強化を急ぎ、環境整備を行っていました。その間、空爆は間断なく行われました。

二十五日定時に十六機来襲、損害多し。

四月二十一日 一機、二十二日 一機、

二十四日 一機、二十五日 一機

我が方も一式攻撃機で索敵、また新鋭機「銀河」も要求しました。敵の機動部隊なり艦艇を発見しても迎え撃つ飛行機がありません。切歯扼腕とはこのことかと思われました。四月十六日の定期便は十九機。

我が方は陣地が一応できたので居住の整備に取りかかりました。空襲の合間を見て、ウニや小魚を捕っていました。敵機が誤爆し爆弾が外海で破裂、物凄い魚の死体が浮かび上がり、皆で食べ切れないほど食べました。

そのうち、内海にも砲を配備し、米軍が外海からあ

るいは内海から上陸しても反撃できる態勢を整えました。

四月三十日と五月一日、トラック島に敵機来襲。陸海軍統帥部御前研究では「マッカーサー、ニミッツの連繋の下、比島に進攻、トラック、メレオン、パラオは敵機動部隊により無力化されるだろう」との判断でした。海軍は豊田副武大将が新たに連合艦隊司令長官に補され、五月下旬を目的に作戦準備の強化を図り、メレオン、ビアリ島の防備を急速に強化することとなりました。

―上層部ではフィリピン進攻説が強いようですが、島嶼の防衛は強化されましたか―

トラック―メレオン―パラオを防波堤とし航空基地群の一環又は単独航空基地群としてメレオンを重視していました。そして水際撃滅に基づく築城及び敵の航空攻撃に対する対空防備の強化、対弾、掩体の急設分散、飛行場の開設、対空戦力の強化が図られ、だんだん半永久基地化しつつあったのです。対戦車攻撃訓練は熾烈を極め、射撃訓練、実弾射撃、手榴弾攻撃も実

戦さながらでした。

五月六日、敵機十二機来襲、防空壕を直撃、十数名の死傷者ができました。爆弾がますます大型化し、五〇〇キロ直撃に耐える壕も役立たない。五月九日、六機来襲、十三日、本部壕に直撃彈落下、中隊長以下二十名爆死、五月十四日、高射砲陣地と海軍医務室が被爆、五月十四日、夕月などに護衛され「神島丸」など五隻入港、二六〇名の海軍部隊が第四十四警備隊の指揮下に入りました。多くの砲と糧秣を持参し、メレヨンの防備は一段と強化されました。

物資、特に糧秣の不足は如何ともし難く、五月十五日から主食一日七二〇グラムが五八〇グラムに減らされました。

マキン、タラワ、クウエジェリン同様、敵は内海から本島に上陸すると判断され、現地自活を含めメレヨン守備計画を作成、内海方面の防備促進を図りました。計画変更によって新たに第三三五大隊を編制、人事の一新が計られました。しかし、サイパン戦に巻き込まれ一部変更を余儀なくされました。野砲陣地、高射

砲陣地でも樹木により偽装しましたが、それらは夏にもかかわらず活着しました。さすが熱帯圏の果樹だと栽培業者の私も思わず感心しました。

「軍令陸軍五八」によりメレヨン上陸陸軍南方派遣第五支隊、第七派遣隊、野戦高射砲隊が独立混成第五十旅団に改編は前記のとおりです。

五月二十三日、米機百数十機をもって南鳥島・小笠原諸島を襲撃しました。メレヨン守備隊員は外部情報に疎く、噂に一喜一憂していました。連合艦隊はバラオ・メレヨンの戦いに総力を結集して米機動部隊に決戦を挑みました。新型のT二〇夜間戦闘機、双発新機種「銀河」もお目見え間近でした。二十七日米軍はニューギニアのビアク島に上陸、比島に大きく近づきました。米潜水艦による被害も激増し、機帆船による物資輸送も凶られました。「あ号作戦」によるメレヨン島の戦略的重要性のため、同島に対する連続空襲による糧秣等の焼失状況に鑑み、五月二十四日機帆船による糧秣、築城資材の強行輸送が命ぜられ、六月四日、二十四日に到着しました。

主力船団は、翌七日十五時、積載軍需品の揚陸を完了、還送患者五六名を乗せ帰航する。翌朝、エンジン不調で遅れた一隻が到着し、米、味噌樽など懐かしい内地の香りの食料品を荷揚げしました。中年の夫婦が二人で内地から、あの船でよくメレヨンまで来てくれた、と感謝・感激でした。帰路、触雷し沈んだのは運命のなせるわざか、悔し涙が止まらなかつたものです。メレヨン回航船も患者を乗せた機帆船も奇跡的にサイパンに着きました。

メレヨンでは揚陸資材を重点的に各班に配分、永久陣地に改めました。ラウル島にも資材の配分があり、陣地強化に努めました。六月九日、敵襲の合間を縫い砲兵の射撃訓練を行い、実力のほどが発揮されました。敵の上陸何するものぞと意気、天を衝きました。

六月九日、小雨の中一機来襲、十一日、サイパンに百二十機、メレヨンに一機、十三日、六機来襲、一機地上砲火で炎上。十四日、四機、十五日、米軍サイパンに上陸の知らせがありました。メレヨン南方海上に灯火信号が点滅しました。二十四日、メレヨン沖で砲

声を聞き、警戒警報発令。二十二日、三十六機、二十三日、六機と空襲は続きました。サイパン攻撃中もメレヨンの偵察と爆撃は休みなしです。その豊富な物量と戦力の余裕にはうならざるをえませんでした。空襲の時、全火器を挙げて応戦、関東軍の砲兵としての矜持を維持しました。敵機の来襲の目的は滑走路、野戦陣地、対空火器等のあらゆる箇所でした。

敵はサイパン、テニアン、グアムは攻略するがトラック及びカロリン諸島（メレヨン）は無力化するが攻略しないと判断されるようになりました。敵の空爆と潜水艦作戦が功を奏し、海上通路は寸断され、島嶼は孤立しました。ラバウル、ニューギニアがその好例であり、メレヨンも例外ではなかつたのです。

メレヨン守備隊も「あ号作戦」の一翼を担い、敵機動部隊がこの海域に誘い込まれたら陸上基地から反撃すると満を持していました。

六月九日、ニュートラックを出航した米軍は十一日から空襲と艦砲射撃でサイパンの日本軍の火力を制圧し、十五日に上陸を開始しました。日米両軍の死闘は

三週間続きました。メレヨン守備隊はサイパン攻防は重大な関係があり、機帆船団を派遣し、六月十日の夕刻サイパンに帰着しました。その頃、機動部隊のマリアナ海域接近に気付かなかつたのです。メレヨンに比べ山あり谷ありの緑の島は比較にならぬ程大きかった。内地送還者一同安心して上陸しました。船内に一泊の後、十一日朝上陸しました。仮救護所は南ガラバン国民学校の畑にありました。空襲警報が鳴り、我が対空陣地は一斉に火を噴きました。眼前に敵艦隊は七〇〇隻を超え、また敵飛行機の襲来も延べ一、〇〇〇機に達しました。元メレヨン隊長長川原大佐は野戦病院、野戦倉庫資材集結地区の整備司令官として奮闘しましたが、勇戦空しく散華されました。

メレヨンから内地送還となった砲一中、大江正信ほか五十七名も消息不明となりました。激戦の中でも孤軍奮闘した東安八十九連隊（約七八〇名）、ポナペ島行き第一派遣佐々木巳代太大尉指揮の歩兵第三大隊六一八名の勇戦ぶりは、さすが関東軍健児の誇りと絶賛されました。

日本軍には一門一挺の火器もなくなりました。七月七日午前三時の突撃と南雲、斎藤両司令官の自刃でサイパン戦の幕は下りました。日本軍の南方中継地、米軍の日本本土攻撃の拠点サイパンは、かくして日米両軍の明暗を分けました。

サイパンを失った南方地域諸部隊、特に持久力に乏しいメレヨン守備隊は厳しい運命を辿ることになりました。B 24の爆撃、主食の減量、邀撃戦と索敵機もない戦力、電探と通信隊と監視兵が眼であり耳でした。度重なるB 24の爆撃で破損した兵器を応急修理しながらの応戦、それに加えて戦死傷の続出、歯を食いしばって我慢しました。

七月十三日、病院船「氷川丸」が入港、夜敵潜水艦の目をかすめ糧秣三週間分と衛生材料三〇〇トンを積み下ろし、内還患者を収容し出航しました。一同無事、日本に帰着するよう祈りました。

それからは、飢餓線上の餓死一步前の生活が続きました。敵機の爆撃は依然として続きました。その合間を縫って自活との戦いでした。

―自活の戦いも大変だったでしょう―

大変でした。話せば一時間以上かかりますので、時間の関係もありますのでこの辺で終わりたいと思います。

## 航測連隊に入営、

### 航測手として

―南方方面転戦記―

山形県 鈴木 栄三郎

―入営年次、入営部隊はどこでしたか。また南方方面を転戦したとのことですが、どの方面へ行かれましたか―

私は大正十年十二月二日生まれで、昭和十八年の兵隊検査です。当時、横須賀市追浜にあった海軍航空技術廠に勤務しており、本籍地の山形には帰れず、横須賀での検査で甲種合格となりました。兵種は仕事の関係からか飛行兵となり、昭和十八年九月十日茨城県水

戸市郊外にあった第十一航空隊第七中隊に入隊しました。そこに五日間ほどおり、同月十五日静岡県浜松市郊外にあった第一航測連隊に転属を命ぜられ、同日第六中隊（中隊長瀧川智雄大尉）に配属となり、以後、無線によるモールス信号の送受信及び「地一号方向探知機」の操作など一般的な戦闘訓練を厳しく受けました。

昭和十九年一月二十一日、検閲終了と同時に航測手を命ぜられ、同年二月四日第六航測連隊（ラバウル方面）に転属を命ぜられ、同月四日輸送指揮官前田少尉以下約五百名の一員として浜松出発、同月五日門司着、同月七日十三隻の輸送船団に海軍の護衛艦がつき門司港を出港しました。私たちの乗った輸送船「打出丸」は七千トン弱、速力は九ノットくらいで、あまり上等な船ではなく、我々の居住区は船倉に何段にも棚を作り、そこに重なり合って寝なければならぬ状態でした。

当時、制海空権は悪化していると聞かされていましたが、飛行機による空襲はなかったものの敵潜水艦の